トピックス

セイヨウナシに発生したセイヨウナシハモグリダニ（仮称）の被害と越冬生態および休眠期における薬剤防除の効果

山形県病害虫防除所 庄内支所　五十嵐　美穂
山形県農業総合研究センター 園芸農業研究所　伊藤　慎一
秋田県果樹試験場 天王分場班　小松　美千代

はじめに

日本におけるセイヨウナシ *Pyrus communis L.* の栽培は，1871年（明治4年）ころに時の政府が米国やフランスから品種を導入したのが始まりとされている。導入後は東北地方の各県をはじめとして各地で試作されたが，日本の気候風土に対する適応性が狭く，北海道，東北地方の各県，長野県，新潟県，岡山県等に定着したにすぎなかった（深井ら，1995）。2019年の収穫量は，山形県が18,900トンで全国の65％を占め，次いで新潟県，青森県，長野県等（農林水産統計，2020）で，セイヨウナシは東北各県や新潟県等寒冷地果樹の重要品目として位置づけられている。

2017年に秋田県横手市，2018年に山形県庄内地域のセイヨウナシ園において，葉に火ぶくれ症状や果実にサビ症状等の被害が確認された。それ以降，秋田県では横手市に隣接する湯沢市でも被害が確認されている。火ぶくれ内部には，フシダニ科と思われるダニが寄生しており，法政大学植物医科学センター上遠野冨士夫教授，鍵和田聡教授に同定を依頼した結果，2013年に北海道で初確認されたセイヨウナシハモグリダニ（仮称），*Eriophyes* sp.2（以下，セイヨウナシハモグリダニ）であることが判明し，秋田・山形両県から病害虫発生予察情報特殊報が発表された（秋田県，2018；山形県，2019）。

日本で栽培されているナシ（主にセイヨウナシ）に火ぶくれ症状を引き起こすフシダニ科のダニは，1910年代よりナシノハモグリダニまたはハモグリダニと報告されており（恩田ら，1914；高橋，1930），ヨーロッパなどのセイヨウナシなどで同様の火ぶくれ症状を引き起こす *Eriophyes pyri* とされてきた。しかし，本種は *E. pyri* とは形態的特徴が異なり（上遠野，2014），被害の症状などから *E. pyri* としてきたナシノハモグリダニまたはハモグリダニに関する報告はセイヨウナシハモグリダニ *Eriophyes* sp.2 と同一種である可能性が高いと考えられる。

一方，ニホンナシにおいてもセイヨウナシと同様に葉に火ぶくれ症状を引き起こすフシダニ科のダニが神奈川県（2012年），長野県（2015年），栃木県（2016年）で確認され，上遠野により既知の *Eriophyes pyri* や *E. pseudoinsidiosus*，*E. pyrimarginemtorquens* とは形態が異なるニホンナシハモグリダニ（仮称），*Eriophyes* sp.1 と同定され，この種はニホンナシにのみ寄生が確認されている。

秋田県では，果皮の赤い‘マックス・レッド・バートレット’や‘スタークリムソン’を栽培する園地が多く，果実のサビ症状による商品価値の低下が，山形県では庄内地域の‘ラ・フランス’果実のサビ症状が確認され，セイヨウナシハモグリダニの生態の解明と防除法の確立が求められている。

本稿では，これまでの調査で得られた知見から，本種の加害による葉や果実の被害症状と越冬場所および越冬後の移動（離脱）時期から推測される防除時期について紹介するとともに，休眠期での薬剤防除効果について紹介する。被害症状と発生生態については五十嵐・伊藤が，薬剤防除については小松が執筆を担当する。

なお，本報告をするにあたり本種の同定並びに貴重なご助言をいただいた上遠野冨士夫教授に厚く御礼を申し上げる。

I　形態および被害の発現

1　形態

セイヨウナシハモグリダニの成虫は乳白色～淡褐色の細長いうじ虫型で脚は2対（4本），体長は0.15～0.17 mm程度の微小なダニ（図-1）で，卵は半透明の球形～楕円

Outbreak and Damage of Pear Leaf Blister Mites on Pears and the Effect of Chemical Control at the Dormant Period.　By Miho Igarashi, Shin-ichi Ito and Michiyo Komatsu
（キーワード：セイヨウナシ，セイヨウナシハモグリダニ，*Eriophyes* sp.2，被害，発生生態，休眠期防除）

植物防疫